# 葦毛通信（いもう）

ミカワバイケイソウ

２０２２年７月７日
豊橋市文化財センター
豊橋市松葉町３丁目１
TEL：0532-56-6060
No. １２７

## 1、2022 年のナガバノイシモチソウ－1

豊橋市佐藤町の幸公園北西隅にある愛知県指定天然記念物ナガバノイシモチソウ自生地では、４月 13 日にナガバノイシモチソウの発芽を確認しました。発芽直後は双葉と捕虫葉が十字形になっていますが、長さは２㎜程（下左写真）で、肉眼での観察は難しく双眼鏡を使用しています。今回は、双眼鏡を使って第１～８地点までの全域を詳しく調査しました。その結果、総数で 4,152 個体の発芽を確認しました。密集して発芽しているところも見られましたが、すべての地点で順調に成長するのではなく、淘汰されて少数の個体が残ったところもありました。

**発芽状態（目盛りは１㎜）**

**発芽状態拡大（2022 年 4 月 19 日）**

発芽後１か月程度で茎が伸び始め捕虫葉が長く伸びて行き、高さと葉の長さが２～３㎝程（次頁左写真）に成長しました。ナガバノイシモチソウは白くなって密集している小さな群落を所々で形成しています。密集しているところの個体は成長が早く、散発的に発芽している個体は成長が遅いようです。

次頁左写真の奥にある黄緑色の植物群落はカリマタガヤの群落で、周辺で少し白くなっているのがナガバノイシモチソウの群落です。カリマタガヤが集中している群落中央にはナガバノイシモチソウは発芽しておらず、カリマタガヤ群落の周辺部に多く見られます。自生地は第１～８地点に分けて管理していますが、各地点でもほぼ同じような発芽傾向にあります。背の高い植物がまばらにある群落ではナガバノイシモチソウは共生できるようですが、カリマタガヤが密集して優勢になっているところでは生育できないようです。

カリマタガヤは第１～８地点に広く見られますが、所々で帯状に密集しています。昨年の植生回復作業では第１～８地点のすべてで地表面をごく薄く削る作業を行い、全体を裸地化しました。その結果、雨が降って水が流れて浮き上がった植物の破片が帯状に堆積するところがいくつも見られ、そこからカリマタガヤが集中して発芽するのが確認できました。帯状に堆積した植物の破片の中にカリマタガヤの種子が多く含まれていたことが確認できました。

**小群落（2022 年 5 月 21 日）**

**拡大（202 年 5 月 21 日）**

特に第７地点（右写真）は緩やかに傾斜し奥が高くなっていますが、傾斜の等高線（左右方向）に沿ってカリマタガヤが帯状に発芽しました。

この様にナガバノイシモチソウ自生地では、カリマタガヤもナガバノイシモチソウも明確な土壌シードバンクを形成せず、種子が地表面に膜状に広がっていると考えられ、これを**膜状シードバンク**と呼称しています。

**第７地点：帯状のカリマタガヤ群落(2022 年 5 月 21 日)**

ナガバノイシモチソウの自生数は 2018 年が 11,487 個体、2019 年が 7,022 個体、2020 年が 12,565 個体、2021 年度が 13,363 個体ですが、今年のナガバノイシモチソウの発芽は昨年と比べて発芽数は多いようですが、若干成長が悪いようです。

**開花状況（2022 年 6 月 5 日）**

**花の拡大（2022 年 6 月 5 日）**

今年の初開花は６月５日で 23 輪、６月 30 日には 1,244 輪が咲き、初めて６月に 1,000 輪を超えました。今年は６月の真夏並みの気温の影響で例年より一か月ほど早く開花数が増え始めました。

# 2、2022 年度モニタリング報告ー3

葦毛湿原では、昨年はＩ・Ｍ・Ｎ・Ｏ地点で様々な実験を行いました。各実験地で行った作業は異なっていますが、いずれも土壌シードバン内にある埋土種子の発芽を阻害している要因を除去して発芽条件を整えて発芽を促進させる実験です。以下では、葦毛通信 No. 122・123 で実験の内容を報告した地点を順番に説明します。

**１）M地点（礫除去実験）**

M地点は昨年の作業で地表面の礫を除去しました。大型の礫は除去しましたが、まだ小さな礫が堆積しており、その間に土壌が溜まってシードバンクを形成しています。南側（下写真左）は特に大きな礫があり、ネザサが繁茂していたところです。ネザサは少なくなりましたが、まだわりと大きな礫が目立ちます。現時点では湿生植物はあまり発芽していないようです。南東側（下写真右）は湿生植物が発芽してきました。トウカイコモウセンゴケ、トキソウ、ミミカキグサが開花し、タムラソウ、イヌノハナヒゲ等が発芽しています。

**M地点南側（2022 年 7 月 6 日）**

**M地点南東側（2022 年 7 月 6 日）**

**２）O地点（根の除去実験）**

Ｏ地点はイヌノハナヒゲの根を除去する実験地を広げました。予想通りイヌノハナヒゲが抑えられて裸地が広がって地表面には水が流れて湧水湿地として良好な状態になっています。

**O地点：東から（2022 年 7 月 6 日）**

しかし、昨年度に根を除去した東側半分（右写真の手前側）ではイヌノハナヒゲが多く発芽しています。西側半分は実験当初からイヌノハナヒゲを根から除去して裸地を維持していたところですが、東側半分はイヌノハナヒゲを刈り取るだけだったので、種子が多く残っているために今回多くの個体が発芽したものと思われます。今年の作業でイヌノハナヒゲの除去を続け西半分と同じ環境が維持できるようにするつもりです。６月にはトウカイコモウセンゴケが開花し、ミミカキグサも開花し始めています。イヌノハナヒゲのような背の高い植物が抑えられて地表面に水が流れ良好な湿地の状態が保たれるようになりました。

**Ｏ地点西側（2022 年 7 月 6 日）**　　**Ｏ地点東側（2022 年 7 月 6 日）**

**３）Ｉ地点（コシダの根の除去実験）**

Ｉ地点では、湿地中心にある葦毛湿原最大の島状部のコシダやネザサの根を除去する実験を行いました。島状部の中心はイヌツゲ等の低木があり地表面近くに広く根を張っています。コシダやネザサの根をできる限り除去しましたが十分には取れていません。

島状部の周辺はコシダのマント群落だったところですが、地表面を水が流れ、ミミカキグサやシラタマホシクサが発芽しています（下写真右)。

**Ｉ地点：南から（2022 年 7 月 6 日）**　　**Ｉ地点：左写真の中央部の近景**

島状部内部は木の根の層や腐葉土層が残り、一部では水が溜まっていますが湿生植物はあまり発芽していません。一部でシンジュガヤの仲間がわずかに発芽しています（下写真右)。日照が悪いのが原因かも知れませんが、今後も観察を続けるつもりです。

**Ｉ地点：島状部内部（2022 年 7 月 6 日）**　　**島状部内部のシンジュガヤの仲間**